

巻頭言

血液関連の検査は、大きく「血球計数・形態検査」と「血小板・凝固検査」に分けられる。本書は、二級臨床検査士資格認定試験の受験、特に筆記試験のための「血小板・凝固検査」の参考テキストとして書かれた。「血小板・凝固検査」の分野でも、用手法による血小板数の算定や出血時間、血小板凝集能検査など主として用手法による検査は残されているものの、やはり多くの分野で自動化が進んでいる。プロトロンビン時間(PT)や活性化部分トロンボプラスチン時間(APTT)を始めとする凝固スクリーニング検査ではほとんど全てが自動測定化されている他、FDP、Dダイマー、アンチトロンビン(AT)検査などでも、検体数の増加に伴って自動化されている。

この「血小板・凝固検査」の分野は、初心者にとってはやや取っ付きにくいところがあるかもしれないが、極めて論理だっているため、基本を理解し慣れてくると、次第に面白さを感じるができる分野である。ぜひ、これを機会に「血小板・凝固検査」を好きになっていただき、二級臨床検査士資格認定試験を突破し、さらに上を目指してくださるようお願いしたい。

2016 (平成 28)年 4 月 30 日

松野一彦(北海道大学 名誉教授)

目次

(1) 血小板数算定..... 1	A. プロトロンビン時間(PT)
I. 血小板数算定の臨床的意義	B. 活性化部分トロンボプラスチン時間(APTT)
II. 血小板数の算定法	C. フィブリノゲン(Fbg)
A. 末梢血塗抹標本の観察	IV. 線溶スクリーニング検査
B. 用手法	A. フィブリノゲン/フィブリン分解産物(FDP)
C. 自動血球計数法	B. Dダイマー
III. 血小板関連パラメーター	(4) 凝固・線溶系の特殊検査..... 17
(2) 血小板機能検査..... 5	I. 凝固系特殊検査
I. 出血時間	A. トロンボテスト
A. Duke 法	B. ヘパプラスチンテスト
B. Ivy 法	C. 活性化全血凝固時間
C. template Ivy 法	D. 凝固因子定量検査
D. その他	E. 凝固第 XIII 因子
II. 血小板粘着能検査	F. 交差混合試験
A. ガラスビーズ法	G. アンチトロンビン
B. その他	H. プロテイン C
III. 血小板凝集能検査	I. プロテイン S
A. 透光度法	J. トロンビン・アンチトロンビン複合体
B. 電気的インピーダンス法	K. プロトロンビンフラグメント 1+2
C. レーザー散乱法	L. 可溶性フィブリン(SF)、フィブリンモノマー複合体(FMC)
D. シアストレス凝集	II. 線溶系特殊検査
IV. 血小板放出能検査	A. プラスミノゲン
A. <i>in vitro</i> 放出検査	B. α_2 プラスミンインヒビター
B. <i>in vivo</i> 放出検査	C. プラスミン・ α_2 プラスミンインヒビター複合体
(3) 凝固スクリーニング検査..... 12	D. t-PA-PAI 複合体
I. 凝固機序	III. 凝固関連の特殊検査
II. 線溶機序	A. PIVKA-II
III. 凝固スクリーニング検査	B. トロンボモジュリン